

## 優秀賞 題名 父から学んだ福祉

涌谷中学校 三年 柴 穂波

私の父は、高齢者施設に勤めており、昨年までは主に高齢者関係の仕事を担当していました。施設に入所されている高齢者の方が体調を崩した時に、一緒に病院まで連れて行って診察を受けさせてあげることも父の仕事のひとつでした。お年寄りは突然体調を崩すことも多く、夜中に施設から電話がかかって来て突然病院に行くことになったり、休みの日に仕事になったりすることもあったため、私はいつの間にか高齢者に関わる仕事に嫌悪感を抱くようになりました。

ところが、ある時、私の考えを変えてくれる出来事がありました。それは、本当に小さなことです。母に頼まれて、父の職場まで書類を取りに行ったときのこと。父が笑顔で施設のおばあさんと話している姿を初めてみました。車いすに座っているおばあさんの前で、しやがみこんで体を低くし、楽しそうに話をしていました。大変な思いをして仕事をしていると思っただのに、とても生き生きとして楽しそうに笑顔で仕事をしている姿をみて驚きました。確かに、思い返してみると、父が家の中で仕事の文句を言っている姿を私は見たことがありません。

私は仕事から帰って来た父に、何が楽しくて笑っていたのか聞いてみました。

「お年寄りには、目の高さを合わせてゆっくりお話ししたり聞いてあげたりすると、笑顔になってくれるんだよ。これまでの人生でいろいろな経験をしているから、こちらが勉強になることも沢山あるし。笑顔で毎日過してもらえることが、今の仕事をしていて一番嬉しいことだよ。」と話してくれました。

父の話聞いていて、私は「めんこばあちゃん」のことを思い出しました。私が小さいころ、近所に「めんこいなあ」というのが口癖の一人暮らしのおばあちゃんがいました。わたしは「めんこばあちゃん」と呼んでいました。当時90歳くらいの年齢だったように思います。私は、このめんこばあちゃんにとっても可愛がってもらいました。おやつにサツマイモを油で揚げてくれて一緒に食べたこと。冬にこたつで一緒にお昼寝したこと。家の中を一緒に探検して歩いたこと。今でも良く覚えています。めんこばあちゃんも、私が顔を見ながら話をするといつも笑顔でいてくれました。私もその笑顔が嬉しくて、毎日遊びにいったように思います。九十歳で小さい子どもの子守りは大変だっただろうと中学生になった今私には分りますが、「めんこ、めんこ」と言いながら笑顔で話を聞いてくれました。

めんこばあちゃんは、私が大きくなるにつれ、いろんなことをすぐに忘れてしまうようになりました。成長していく私とは反対に、少しずつ体のいろいろなところが不自由になっていきました。怒りっぽくなっているときもありましたが、私が行くところも笑顔でいてくれました。たとえ何度同じ話をされるようになって、私はおばあちゃんが好きでしたし、おばあちゃんには笑顔でいてほしいと思いました。めんこばあちゃんは私が小学生の時に亡くなってしまうりましたが、もつと何か返してあげられたら良かったのにと、今でも思います。

高齢者社会と呼ばれる現代。これまで子供やお年寄りの手助けをしながら年を重ねてきた高齢者の方が、笑顔で穏やかに生活できる世の中であってほしいと思います。

今の私には何ができるのでしょいか。父のように優しい気持ちで接すること。元気に挨拶をすること。電車やバスで自分からさりげなく「どうぞ。」と言えるようになること。まずは、当たり前のことを自然に行えるようにしていきたいです。

めんこばあちゃんには返せませんが、その分を今、誰かのためにと思うのです。